

第2回高知県産業振興計画フォローアップ委員会農業部会

日 時：平成23年1月12日（水） 13：30～16：30

場 所：高知県職員能力開発センター3階「研修室」

出席者：

（農業部会員）宮本修 大山端 戸田政克 野村有弘 三谷英子 宮脇真弓
○山崎實樹助 八百屋市男

※○：部会長

（県農業振興部）田中部長 前田副部長 桜谷畜産振興監 笹岡農業政策課長
山本農地・担い手対策課長 林協同組合指導課長 二宮環境農業推進課長
原産地づくり課長 横山流通支援課長 井上農業基盤課長
（県産業振興推進部）有澤地産地消・外商課課長補佐

●議題1 「産業振興計画（農業分野）の進捗状況及び追加・拡充等について」

～ 説明内容については省略 ～

～ 各項目ごとに意見交換 ～

○生産から流通・販売までの一元的体制の構築①

〔新需要開拓マーケティング事業、顔の見える販売〕

（大山部会員）

・流通については、園芸連としても県と連携して取り組んでいるところ。一方で、農地や担い手の減少、今年は低温などにより、供給量・供給力が減少している。販売の仕組みも大事だが、（販売と）供給量・供給力との兼ね合いが重要である。

・加工の流通・販売は、生鮮とは違う。加工をやることで、どれだけ生産者の所得向上につながるのか検討し、製品化と所得向上を併せて検討していくことが重要である。

（横山流通支援課長）

・現在、東急ストアでは土佐鷹を扱ってもらっており、全店舗で取り扱いたいという話もあったが、供給量の関係で店舗を絞っている。今作られている品種（竜馬など）を土佐鷹へ変えていくことなど、消費地のニーズにどう対応するかが課題と認識している。

・加工について、業務用として評価して売る方法と、“スソ物”を安く加工へ回すという方法がある。この2つのやり方の違いに留意しながら取組を進めていく。

（八百屋部会員）

・加工と生鮮については、バランスを考えながら取り組む必要がある。また、6次産業化といったような、生産者自身が加工することで所得確保できるかということについても進めていく。

・生産基盤については担い手の問題やハウスの確保などの問題もある。後ほど説明がある。

○生産から流通・販売までの一元的体制の構築②

〔集出荷の仕組みづくり〕

（宮脇部会員）

- ・中山間地域の経営規模の小さいJAでは集約化されそうな動きも見られる。
- ・横持ち集荷については、例えばイチゴのような品目は、あまり動かさない方が良いので、品目によってやり方を考えてもらいたい。

（大山部会員）

- ・出荷場間の横持ちについて、計画は良いと思うが、地域ごとの思いもある。経費削減だけでなく、計画を進めるうえでは、産地づくりという視点にも配慮をお願いしたい。

（原産地づくり課長）

- ・JA 南国市を中心に3JAのまとまりをモデルとして取り組んでいるが、それぞれの生産部会の話も聞いており、部会運営上（生産者が）分散するという問題がある。地域と協議しながら進めているところなので、今後の取組についてアドバイス等をお願いしたい。

（山崎部会長）

- ・現在15のJAがあるが、担い手の高齢化が進む中で、今のままではコスト的に大変であった。1JAにして効率的にできないか、それが農家にとって良いか、地域ごとの特性と合理化とのバランスをどうとるのかなどを検討しているところ。

○まとまりのある園芸産地の再構築

（山崎部会長）

- ・まとまりのある産地づくりの取組について、H23年度以降は品目を拡大する予定があるか。

（原産地づくり課長）

- ・県域に品目拡大したいと考えている。11の基幹品目については、団体と一緒に取り組んでいきたい。また、生産者交流会では、他産地との交流で刺激になったという声をもらった。引き続き取り組んでいく。

○環境保全型農業のトップランナーの地位を確立

（山崎部会長）

- ・IPM技術の導入について、新たに黒潮町など地域が増えたという説明であったが、具体的に品目は何か。

（二宮環境農業推進課長）

- ・これまで、ナス・ピーマンを中心に天敵利用がされてきたが、黒潮町などで、キュウリでの天敵利用に取り組む生産者が増えており、それらに対し事業でも支援している。

(三谷部会員)

・オランダとの交流の説明があったが、これまでも東南アジアやブラジルなどからの受入れをしてきた経過があり、高知の技術を教えてきていると思う。人材も育てていると思うが、これらのOBの人に働きかけはしていないのか。

(前田副部長)

・ベンゲット（フィリピン）からの受入れについてはフォローアップしている。過去においては園芸で受け入れていたが、国によっては畜産や林業など多岐にわたる。フィリピン以外はフォローアップできていない。オランダと交流を進める上での一つの課題として認識している。

(大山部会員)

・県版 GAP と園芸連のエコシステム栽培の関係について、エコシステム栽培の中の重要なポイントとして GAP が入っていると認識している。GAP とエコシステム栽培が個々ではなく、リンクさせて（生産者が）動きやすいよう指導してほしい。

・LCA（ライフサイクルアセスメント）について、重油や原材料の価格高騰と LCA との関わりがどう出てくるか知りたい。

(二宮環境農業推進課長)

・環境保全型農業と慣行農業で、CO2 排出量にどれくらい違いがあるか（環境保全型農業の売りに生かせないか）を把握するため、調査しデータ収集をしているところ。

・エコシステム栽培と GAP については、両者の持つ性質の違いも踏まえ取り組まなければいけないが、エコシステム栽培の要件に GAP の取組が入っており、目指す方向性は一致していると考えている。

【 休 憩 】

○生活できる所得を確保するこうち型集落営農の実現

(戸田部会員)

・グリーン・ツーリズムの具体的な施策はあるか。

(原産地づくり課長)

・具体策はまだないが、集落営農組織の話し合いの中で、いろいろな意見が出ている。例えば、体験や農作物の加工を進めたいというもの。それらの集落からハードあるいはソフト面での支援要請があれば、既存の事業等で支援していく。集落営農組織内の意向を聞きながら対応していきたい。

(笹岡農業政策課長)

・集落営農組織の活動については、先進事例調査等の要望があれば、45万円以内のソフト支援も考えている。

(大山部会員)

・加工の取組について、施設整備への支援の内容は何か。費用対効果もあると思うが考えを聞かせてほしい。

(原産地づくり課長)

・こうち型集落営農を進めるなかで加工に取り組んでいる。例えば、南国白木谷の乾燥タケノコや、七ツ淵の四方竹など。今後も、集落営農組織の加工の取組に対する意向を集約し、ハードとソフトの両面で支援していく。またアドバイザーの活用についても支援をしていきたい。

(戸田部会員)

・グリーン・ツーリズムについて、旅行会社とのリンクはするのか。

(田中農業振興部長)

・今のところ具体的なプランはないが、観光農園を検討している地域もある。今後はそういう（旅行商品のような）形も出てくるかと思う。また、水産分野で行っているブルーツーリズムのノウハウも学んでいきたい。集落を核にしたコミュニティビジネスが、目指すべきところと考えている。

・加工については、馬路村が1つのビジネスモデルと考えている。個々の農家では出来ないことでも、個々の農家が持ち寄った生産物を一緒に加工することにより、雇用も100人生まれている。1つの理想型として、農業者が主体となった取組をしていきたい。

(野村部会員)

・加工について。当社（アミノエース）では、国内産、県内産などいろんなものを使っている。日本一高い「ユズポン酢（極み）」や、はちきん地鶏の鶏ガラと土佐のショウガを使った「ショウガポン酢」を作っており、ショウガなどは体に良いということで売れてきたところ。豆菓子でも、文旦、土佐茶、ショウガ等をコーティングしたものを売っている。

・商品自体の内容とは別に、売り方が重要である。当社では、やなせたかしのキャラクターを使ったり、芋ケンピとコラボしたり、小袋の詰め合わせにするなど、市場性のある商品づくりをすることが大事、売り方を大事にしている。

・次に考えているのは四万十栗の商品化。四万十栗は量が少ないので、植えることから始めるなどを考えている。食べたいものを作り、買いたい物売る。キャラクターに乗せて売るのも一つの方法と考えている。

○品目別総合戦略の実践

(山崎部会長)

・先日の新聞で、オガクズ不足で飼料価格が急騰しているとの記事があったが、高知県も同様か。

(桜谷畜産振興監)

・製材業界の縮小のため、地域によっては不足している。間伐材を使ってオガクズを作っているところもあるが、全体としては不足している。

(三谷部会員)

・(土佐茶の振興等について) 食品の味は子供の時から知らないといけない。過去に、「土佐茶」として提供したのに対し、「美味しくない」というクレームが多く、かえって足を引っ張る状況があった。入れ方の問題と思うが、急須でお茶を入れることが無くなってきた。出前授業や、フルーツ等の給食提供に取り組んできたと思うが、土佐茶についても本来の美味しさを示していくことが大切なので、指導をお願いしたい。

(二宮環境農業推進課長)

・出前授業で、正しいお茶の入れ方などを学んでもらう取組を続ける。また、女子大の生徒とも一緒にブランド開発(茶楽々)をするなど、商品拡大を進めているところ。土佐茶カフェについても、土佐茶を知ってもらうことが大事だと考えているので、取組を進めていく。

(山崎部会長)

・茶のアドバイザーとはどういうものか。

(二宮環境農業推進課長)

・茶のアドバイザーとは、お茶の入れ方の指導や、お茶の知識をPRできる人のこと。静岡県など大産地にはアドバイザーが多数いる。現在、高知県内には19名いるが、今後も増やしていくことで、土佐茶や日本茶の良さを知ってもらう取組を進めていく。

○担い手の育成と生産資源の保全

(山崎部会長)

・認定農業者の扱いについて、国で廃止の問題が出ているのではないか。

(山本農地・担い手対策課長)

・認定農業者の廃止は聞いていないが、国は「多様な担い手」にシフトしている。ただ、県としては、5年間の営農計画を持って農業経営を行っている認定農業者の育成に継続して取り組まなければいけないと考えている。

○新エネルギーの農業分野での活用

(山崎部会長)

・木質バイオの実証を行う一方で、ペレットの安定供給が問題である。資料4の29ページに「農業団体等との推進協議会を設置」と記載しているが、このような場で議論する必要がある。

(大山部会員)

・資料4の30ページで、「販売金額の拡大」と記載しているが、(生産者の所得をベースとした)生産性を高める経営安定といった表現の方が適当と思うがどうか。

(二宮環境農業推進課長)

・新技術による収量アップということで「販売金額の拡大」と記載したが、生産コストを含めた「経営の安定」が重要な課題であり、取組の中で検証していくことが大事と考えている。

○全体

(宮本部会員)

- ・青果物の生産・流通・販売面で考慮すべきことは3点ある。
- ・1つ目は「安定供給」。東急ストアでは、高知とのパートナーシップの中で、従来販売していなかった品目(小ネギ、ショウガ)や、特別栽培ピーマンなども販売できるようになった。売場も確保できるようになったが、東急ストアは100店舗ある。今後、販売拡大、店舗数拡大については、供給量確保と安定供給をお願いしたい。
- ・2つ目は「顔の見える販売」。販売店舗数が増えれば、それぞれの店舗の売り方が異なる点にも留意すべき。多様な売り方においても、産地情報が消費者に伝わる「顔の見える販売」方法を考える必要がある。
- ・3つ目は「花き」の販売。花きの販売は、量販店でも八百屋でもできる。青果物と花きの販売は分けて考えなくてもよいのではないか。一緒に販売すれば、販路拡大につながるのではないかと思う。

(山崎部会長)

・進捗状況はおおむね計画どおり進んでいること、また、計画を拡充することについて、部会の総意として、第2回フォローアップ委員会に報告させていただく。

《異議なし》

●閉会